

学級経営を基盤とした集団学習の在り方 — 小学校算数科におけるグループ活動を通して —

19076 半澤 和也

キーワード：協働 協同 集団 学級経営 算数科

I 研究の目的・ねらい

1 研究の背景

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進について述べられている。そこでは、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。」（新学習指導要領解説【総則編】より抜粋）とある。筆者は、その実現のために「集団学習」について取り上げる。学校とは、集団によって学習や生活が形成される場所である。そのため、学級経営と学習のつながりを意識することは重要である。文部科学省が定める学級経営の内容として、学級目標の設定、好ましい人間関係や集団づくり、生徒指導、教室環境の整備、保護者との連携などが挙げられている。

本研究では、子供一人一人と向き合うことを集団形成の前提として、学習集団づくりに焦点を当てた算数の授業づくりについて検討・実践を行う。

2 研究の目的

本研究では、算数科において集団学習を用いることを前提として、子供たち自身で課題を解決する姿勢を養うために授業以外に学級経営においてどのような活動又は教員のサポートが必要なのかを考察し、算数科の授業づくりとともに学級経営の取り組み方に生かす。

3 研究の方法

(1) 文献研究 (2) 授業実践での成果や課題 (3) 先行の実践記録、授業参観や模擬授業の記録の検討

II 研究の結果

1 文献研究や授業実践から考えた「協同学習」と学級経営について

(1) 「協同学習」と「協働学習」の違い

集団学習についての研究の考察を進める中で、「協働学習」「協同学習」という用語が頻出していた。そこで、「協働」と「協同」という言葉に関する考察を行った。坂本（2008）は、「協働学習」は「collaborative learning」にあたりとし、3つの特徴をまとめた。

一方で、「協同学習」との違いに関し、関田（2005）は、「協同学習」について4つの特徴をまとめている。これらの観点から、「協働学習」とは「協同学習」の分類の中におけるより高度な学習形態として考え、「協働」という言葉を、「多様な人々が同じ目的に向けて協力する」という意味として捉えたい。ただし、実際の学習現場においては「協同学習」と「協働学習」を使い分ける必要がある。また、「協同学習」と「協働学習」の最終的な目的は一致する。

表1（協同学習と協働学習の区別）

	教師の役割	想定する学習者像	学び考える内容
協同学習 (cooperative learning)	課題解決のための、方針を示す。	課題解決に必要な知識を与えられながら考える。	課題に対して、多様な考えを出し合う。
協働学習 (collaborative learning)	課題提示後の活動方針は子供に委ねる。	課題解決に必要な知識が備わっている。	課題を解決して、成果の共有を目的にする。

【出典：関田一彦・坂本旬・文部科学省の観点を基に筆者が作成】

(2) 「協同・協働学習」と学級経営の関連

小原・大竹（2009）は学級での居心地のよさが学力に与える影響について分析を行い、そこで「教員は児童の特性に応じた指導を行うこと」などが、居心地のよい学級づくりにとって有効であり、学力の向上につながると提言している。その際、教師からの働きかけだけでは効果は不十分であるとし、子供同士で学び合う場の設定が必要だと指摘している。子供同士で学び合う際の留意点としては、発達段階に応じた明確で簡潔なルールの設定が必要だとした。また、協同学習を学習の中で取り入れる際のルールとして「友達の見解は最後まで聞くこと」「友達の発言についてはサインや発言など必ず反応を示すこと」などが挙げられている。それにより、子供たちにとって安心して考えを発表できる場が設定されており、学力の向上につながったと考えられている。しかし、授業だけでルールを定着させることは難しく、学級経営における一つの指標として先に述べたルールを取り入れることで、より効果的な学力の向上につながっていることを確認している。授業において、子供同士で学び

合う「協同学習」において、授業だけではなく日頃の学級経営においても互いを認め合う経験や自分の考えを発表する練習を繰り返し実践することが重要である。

2 応用実践研究での授業実践からの考察

(応用Ⅱ K小学校 第3学年「分数を使った大きさの表し方を調べよう」)

(応用Ⅲ F小学校 第2学年「新しい計算を考えよう」)

実習校では授業はもちろん年間の学級経営に関する取組がなされていた。そのため、年間を通した学級経営の取組を「長期的な取組」、授業内での取組を筆者が実践した授業も含めて「授業での取組」として考察を行った。無論、「長期的な取組」と「授業での取組」は互いに関連した取り組みである。

(1) 長期的な取組

長期的な取り組みとして①座席の編成、②朝の会や帰りの会での取組、③係活動の3つの点について考察を行った。①で見られたのは、学習意欲の喚起に必要な子供(以後Aさんとする)に対する支援である。具体的には、Aさんの周りに自主的に手伝う意志のある子供を配置するということである。K小学校ではAさんは板書をノートに書いたり連絡帳に書いたりするのに時間がかかり、次の行動に移る際に遅れが見られた。それを周囲の子供たちが自主的に手伝うことで、Aさんが大幅に活動に遅れることはなかった。教師がAさんに対して注意したり他の子供に支援を促したりした場合、学級内でAさんに対してネガティブな認識が生まれることが予想される。そのため、子供同士で助け合う場を設定するために必要以上に教員が指示しない場の設定が重要である。②で見られたのは子供同士で自由に発言する場の設定である。その日のヒーローや今日頑張ったこと、頑張っていた人の子供たちが自由に発表する時間がある。設定当初は子供の発言に対して教員が褒めるなど反応を示していたが、後に子供たちから自然と反応が返ってくるようになっていた。教師が手本を示しながらも子供同士で互いに認め合う場の設定は、授業で意見を発表する際にも有効に作用したと思われる。③では、役割分担による責任感の構築や子供同士の気づき合いにつながると感じた。F小学校では、係を決める際教師が「どんな係がこのクラスに必要だと思いますか」という声掛けをしていた。その際、子供たちからは理由と共に必要だと思う係活動が発表された。その意見が採用されたことで、子供たちは自分の意見が教師だけでなくクラス全体に認められたという安心感が生まれていた。また、採用されなかったとしても、教師から「係にはならなかったけど、クラス全員で頑張りましょう」というプラスの声掛けがなされたことで、他の子供たちもクラス全体の事として考える姿勢が見受けられた。

(2) 授業での取組

今回の実践では、①子供の思考の視覚的共有、②子供の間違いからの授業の展開の2つの観点から考察した。①では、分数の大きさを考える際にテープ図を用いて問題を考える時間を繰り返し設定した。また、テープ図を用いて考える際、教科書は開かずに教師が用意したテープ図を黒板に貼って考えるようにした。教科書を開いて授業を進めると、学習意欲の高い子供は先に進もうとして教師の話や他の子供の説明を聞いていない姿が観られた。そのため、全体で考えを共有しながら授業を展開する手立てを実践した。その結果、発言した子供の意見にクラス全体が集中するようになり、考えに対する反応が活発になった。また、黒板のテープ図を用いて間違った答えを発表した子供に対しても、なぜ間違った考えになったのかという思考の過程が他の子供たちにとっても分かりやすくなっていた。これは②の観点にもつながった。「どうして○さんの考えが違うと思うの」という教師の声掛けに対し、子供たちは思考の過程を見ているのでどこが自分の考えと異なっているのかという点について考えやすくなっていた。これらの活動を通して、問題に対して互いに学び合うという姿勢が以前より積極的にみられるようになった。また、長期的な取り組みの中で、自分の意見を受け止められる環境や自由な発言が保障されている場の基礎が作られていたことも学習に有効だったと考える。

算数では自分の考えを示す方法として、テープ図や表やおはじきなど様々な方法がある。具体物の活用を繰り返しながら、学年が進むにつれて抽象的な考え方を身に付けていく。具体物を自分の考えをまとめるためだけでなく、他者との学び合うための一つのツールとして活用することで、学級全体での学び合う活動の充実が期待できる。

Ⅲ 研究成果の学校教育における位置づけ・意義、応用性、期待

「学び合い」とは学校教育において重要な指標の一つである。今回算数で具体物を用いた学び合いと学級経営を関連付けたが、他の教科でも学級経営で構築した基礎をどう生かすのか、今後の課題として考えを深めたいと考える。

Ⅳ 引用・参考文献

小原美紀、大竹文雄(2009)「子どもの教育成果の決定 要因」(『日本労働研究雑誌』No. 588、pp. 67-84)

坂本旬(2008)「『協同学習』とは何か」(法政大学キャリアデザイン学会『生涯教育とキャリアデザイン』5、pp. 49-57)

関田一彦・安永悟(2005)「協同学習の定義と関連用語の整理」(日本協同教育学会『協同と教育』1、pp. 10-17)